21　海辺図　円山応挙　一幅

江戸時代中期（十八世紀）
紙本着色
二三・三×三〇・〇

十八世紀に京都画壇で活躍した円山応挙（一七三三～九五）による本作は、実景の写生図をもとに描かれたものである。小画面の手前には、小波が激しく打ち寄せる岩場とそこに根を張る松樹を描き、画面奥の沈みゆく夕陽へと細長い岬が続く。海辺の高い位置から見渡した景観で、岬手前には集落が描かれる。目の当たりにしたこの光景に深く感動した応挙の心情が伝わるような一図で、波による躍動感、厳しい自然により生み出された岩の険しさと松樹のたくましさによる臨場感、遠くに沈む夕陽から感じられるゆったりとした時の流れが融合した小画面は、見る者をその場に誘う。この地が何処かは特定しがたいが、但馬や紀伊、近江などの大寺院の襖絵制作等も行っていることを考えれば、その往来の中でとらえた光景であろう。応挙が絵画制作に関わる様々な事柄を書き留めた《写生雑録帖》にも様々な山水風景が見られるように、応挙の作画において、実際に自身の目でとらえた風景は重要な素材であり、様々な優れた作品の中に、実景写生から得た構図や岩や樹木などのポーズが見られる。

本作品は、応挙が皇室との関わりを深め、御用を多く務めた後桜町天皇から光格天皇にかけての頃からの伝来品であろうと考えられる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan